

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 葛谷 潤

本論文は、ダメットが『分析哲学の起源』においてフレーゲと対比しつつなしたフッサール『論理学研究』に対する批判に応答することを通じて、言語的志向性の基礎に関する『論理学研究』の哲学的立場と意義を適切に再評価することを目的とする、きわめて意欲的な論考である。ダメットは、フレーゲが指示概念を通じて展開した意味論に対抗できるような理論を、フッサールの著作に見出すことは出来ず、それゆえ「言語的意味と言語的指示についての明瞭な理論を求めるならば、参照すべきはフレーゲであってフッサールではない」と論じたが、本論文は、スタルネイカーの「基礎意味論」の概念を手がかりに、「言語的指示に関する意味論についての明瞭な理論を求めるとすれば、参照すべきはフレーゲであってフッサールではないかもしれないが、言語的意味に関する基礎意味論に関しては、参照すべきはフッサールであってフレーゲではない」ことを論証しようとする。

そのため序論で問題設定を行ったあと、第1章「ダメットのフレーゲ解釈とフッサールの評価」ではまず、フレーゲの指示(Bedeutung)概念がある明確な原理の下で運用されていることをダメットが評価し、フレーゲの指示概念のうちに「意味論的値」の概念を見て取っていたことが確認される。続く第2章「フッサールの対象概念と意味論的値」では、フレーゲの指示概念に当たる概念がフッサールには見出されないとするダメットの批判に対して、フッサールの側から応答しようとした富山豊の先行研究を主な手がかりにして、フッサールにはフレーゲのような(すべての構文論的カテゴリーの表現に対応する)指示概念は見出されないが、名辞と文に関しては相応の見解が見出されることが確認される。第3章「意味論の基礎」では、スタルネイカーの「基礎意味論(foundational semantics)」という概念が参照され、言語的指示に関する意味論に対して、言語表現が意味論的値を持つその「仕方」を明らかにする「メタ意味論」的探求が可能でありまた必要であることが明らかにされる。そして基礎意味論には主体のある種の「識別能力」に関する考察が不可欠であることが論じられる。第4章『論理学研究』における基礎意味論では、フッサールが「意味(Bedeutung)」という概念を通じて具体的な基礎意味論的考察を展開していたことが、テキストに即して入念に明らかにされる。第5章『論理学研究』と意味の神話では、フレーゲには同様の基礎意味論的考察が見出せないこと、それに対してフッサールは意味を「スペチエス」として捉えたことにより、基礎意味論的考察に道が拓かれたことが論じられる。最終第6章『論理学研究』の「現象学」では、以上の考察を踏まえた上で、『論理学研究』における「現象学」の概念と方法論が、主として第2巻序論の叙述をもとに明らかにされ、考察が締めくくられる。

試問では、意味論と基礎意味論との関係や、『論理学研究』の「意味」概念と『イデー・ンI』以降のノエマ概念との関係等について質疑がなされ、今後のいくつかの課題も明らかとなった。しかし全体としては、これまで十分になされてこなかったダメットのフッサール批判への応答を入念な考察によって試み、『論理学研究』の現代的意義を明らかにしえた、きわめて意欲的かつ秀逸な論考として、本論文は高く評価された。よって本論文は、博士(文学)の学位を授与するに十分に値するとの見解で、審査委員全員が一致した。